

会員制情報誌「たのし」に執筆



氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

戦国時代の絵師長谷川等伯のことを情報誌「たのし」に書きました。

小生のできる活動の一端です。

PDFにして知り合いにも送っています。

掲載された記事はこちらです。

↓
[長谷川等伯のふるさと七尾.pdf](#)  



戦国時代の絵師 長谷川等伯を偲ぶ

等伯のふるさと能登七尾へ

ななお

とうはく



旅立つ等伯（七尾市役所提供）

金沢からJR七尾線の急行に乗
り50分で七尾に着いた。能登
半島内浦の古くから栄えた良港
だ。駅前広場に立つ桃山時代の
絵師長谷川等伯の銅像が迎えて
くれる。七尾は等伯が35歳まで
過ごしたふるさとである。青雲
の志を抱いて上洛し、多くの苦
難に立ち向かい確固たる地位を
築いた一代の画家だ。2010
年2月、上野の東京国立博物館
で開催された没後400年「長
谷川等伯展」を観て、その素晴
らしさに魅せられた。色鮮やか
で精緻、それでいて大胆な構図
や作品の大きさに圧倒された。

り素直に感情移入でき、等伯に
手を引かれるように高い所に辿
りついていたという。ただ画
家の生涯を書いたのではなく、
450年前の現存する絵の前に
立つて絵師の魂を感じ取り、時
空を超えて当時の感動を得ら
れたと語る。小説「等伯」は
2013年1月、直木賞に輝い
た。本を読み絵を観ると、苦難
に立ち向かう等伯の気迫を感じ
られるようになった。

中世 小京都と呼ばれた七尾

七尾は室町時代から畠山氏が
守護として治め、9代180
年の歴史をもつ城下町だ。京都
とは海のルートで繋がっていた
ので、中世では北陸一賑わう湊
町だった。後に加賀藩の領地に

なつたが、北前船の寄港地と
して各地の文化を運んできた。
一本杉通り商店街を散策した
どっしりとした構えの蝋燭屋
醬油屋、昆布屋、仏壇店等老舗
が連なり、歴史の香りがする街
並みだ。七尾湾を遊覧し、等伯
が見たであろう松林を探した。
富山湾の彼方に望めるはずの立
山連峰は霞んで見えなかった。
きれいに見える時は風になると
いった。海の幸が豊かで寿司は旨
かった。

等伯を支えた能登の風景

長谷川信春（等伯若年期の
号）は1539年の生まれ。戦
国大名畠山氏家臣の次男だった
ため、染物屋の絵師に養子に出
された。33歳の時に妻子と共に
七尾から京へ上ったが、無名の
絵師は17年間の空白の時代を
経て世に出たのは51歳の時だ。伝
を求めて千利休に出会い、やが
て豊臣秀吉に近づいた。秀吉に
認められ、天下一の御用絵師に
登りつめる。狩野派との熾烈な
戦いは小説「等伯」を読むとよ

くわかる。当時隆盛を極めた狩
野永徳に對抗し、長谷川派を立
ち上げ認めさせ、その地位を確
立した。等伯は田舎者らしい粘
り強さがあり、本質を見極めよ
うとする生真面目さがあつた。
雪に閉ざされ、長い冬をじつ
と耐えて春を待つしかない能登
の氣候と風土が育んだものだろ
う。望郷の念に駆られる等伯を
支えたのは、七尾の海と能登の
やさしい風景だった。仏絵師と
して、また熱心な法華信者とし
て御仏の教えを衆生に伝えるた
めに身を惜しまず画業に打ち
込んで精進した。等伯の胸の底
には、亡くなった妻や天折した
息子久蔵、よき師であつた利休
への名状しがたい無念の思いが
あつた。

晩年の心象を描いた松林図

水墨画の名作として名高い
「松林図屏風（国宝）」を正月に
東京国立博物館で観た。多くの
悲しみを背負っ
て描いたと言わ
れる松林図であ
る。ふるさと七
尾の海岸沿い
には、強風に耐え
立ちすくむ松林
がずっと続い
ていたといわれ
る。霧が漂う不

思議な寂寥感、人生の悲しみ
喜びを味い尽くした末に辿り
ついた晩年の心象だという。こ
の絵は誰の注文かわからないら
しい。等伯は慶長15（1610）
年72歳の時に、徳川家康に呼ば
れ江戸へ下向した。高齢と長旅
の疲れで着いて2日目に無念に
も亡くなつてゐる。

七尾美術館を訪ねると等伯の
作品が2点展示されていた。4
点収蔵しているが、テーマを変
えシリースで等伯の企画展を開
き、この春22回目になる。ま
なく青柑祭（5月3〜5日）を
迎える。曳山行事はユネスコ無
形文化遺産に登録された。舟形
の巨大な山車が並ぶ姿は圧巻で
あるという。
（この項おわり）

参考文献
安部龍太郎「等
伯」（上・下）
2012年9月
刊（日本経済新
聞出版社）



国宝「松林図屏風」（東京国立博物館蔵）



青柑祭の日本最大級の曳山（でか山）
（七尾市役所提供）